

の働きが重視されている。つまり教団教育という見地を欠くことができないのである。教団の新しい構成員をつくるいわゆる人づくりである。教団自体が絶えず日常的に営む構成員づくりを教団教育として自覚的に定着させることが今日の急務になっていると考えるのである。仏教法華経を堅持・弘通しようとすることは、わが教団の自己目的とするところである。その目的のために教団は自己の組織・構成を自由に改廃し、自律的で活発な布教伝道をすゝめようとしてきたものであり、かつすゝめようとしている生な姿が教団ではないかと考える。とするならば、教団が自己目的として引き受けた法華弘通の任務をさまざまな動搖や腐敗を注意深く取除き、教団の構成員による次の構成員を教育すること、あるいはその構成員を拡大しようとするところに教団教育の仕事がある。こうした教団教育は、いつの時代においても、どんな宗教教団においても、教団を構成する者によって次の構成員を教育する点、教団の存廃をかけているものであって、その真剣な営みのうちに教団教育が存するといふことができる。

このように教団教育を思考したのは、本宗の教育面の充実に期待するからであり、他教団との比較も便利であり、かつ緊張と競争関係にあることを現時点において確認した

ためである。教団教育の内容についても、本宗の姿勢が反映され、質量共に向上し得る方向を持たねばならない。教団と教育の関連、そのかゝわりあいを再確認し、教団教育の役割が正当な評価が与えられなければならないのである。実際問題として後継者の養成が叫ばれ、後継者布教者等の養成の仕事は本宗の各種教育機関において主に担当している。だが、教団と教育との関連はどうなっているのだろうか、バラ／＼な印象をぬぐいきれないのが現状ではないかと思う。むろん教団も教育も自律したものであり、役割に応じた分業があつてしかるべきであるが、しかし教団と教育をつなぐパイプはどうなっているのか。おゝげさに云えば教団教育の不在と云い得るのである。現状は、良心的な教師にさゝえられて教育が行われているが、良心的な教師を支える意味でも、教団教育の主体が創造されることかぞまれているのである。

次に教団教育の主体を創造する問題にかゝわつて、教団教育の目標と内容の問題がある。しかし教育内容に関する資料不足を告白せざるを得ない。その素描すら困難を憶えるわけである。教育資料調査がなければ、わが教団独自の「教団教育」の努力の跡がたどり得ないのみならず、今日の教団教育のあり方を模索する上で欠損部分となる心配が

あつて、教団教育に関する資料収集は急を要すると考える。たゞ教団教育の現状の調査には費用、その他の制約があつて確実な調査資料を提供し得ないのである。たゞわずかの資料によつて教団教育の問題を考えざるを得ないため、問題点を描き得ない点は了承して頂きたい。

(三)

次に教団の教育の誕生について考えてみよう。教団の教育は単に理念的なものにとゞまらない。生々しい具体的な場面で教育が存在するのである。そうした教団教育はいつどうという形で、しかもどんな内容をもつて誕生したものなのか。教団の教育とは何かを探究する上では欠くことができないものである。教団教育の性格にかゝつた問題だからである。

周知のように教育は教育する者と教育される者との関係ができ、師説が非常な重みをもつたものとして教育される。されるVとということがあつて教育が成立する。教団の教育においても同様である。教団の自己目的である法華経弘通の誕生と期を一にするもので、日蓮聖人の法華弘通とそれを受け入れる大衆との関係が生れたとき、ごくわずかな教団ではあるが教団教育という問題領域が生れている。師の教えによつて教育する・されるVということが教団の

教育の内容となつたものであり、A師V日蓮聖人滅後において、教団の教育の主要な内容は師説ということであつた。わが教団の教育の誕生を、聖人在世に求められよう。したがつて教団教育の性格は師説を中核とした内容のものでなければならぬことは云うまでもない。法華信仰に立脚して法華経弘通を教団が、あるいはその構成員が自己目的としたとき、どこまで師説を教え・教えられるという場面に生かし得るか。教団教育特有の問題が常に至難な問題となつて存在しているのである。

師説を教え・教えられるという教団の教育伝統の淵源に立脚した今日の教団教育の内容が摸索されなければならぬであろう。しかし、反論も予想される、時代が違ふという有力な反論である。また聖人の教える技術に還元する議論がある。私はそうした見解にはすぐに賛成しかねるのである。というのは教育内容である師説が時代によつて大きく変わつてしまふのだろうか、確かに時代の変化の影響は受ける、だが、法華信仰が變つてしまふわけではないし、かえつて時代の変化に対応し得るダイナミックな師説を誇ることができるとは思ふのである。希望的な観測を述べているわけではなく、時代の変化に対応し得るためにも、教団教育ということの今日的なあり方を教育問題と

して模索しなければならぬのである。それは一人ですき得るものではない。全教団として模索がはじまらなければならぬと考える。

そのような意味で、教団の教育誕生を考えていく必要がある。いうまでもなく聖人在世の時、法華弘通の目的のためにご苦心された問題の一つに門弟たちの法華教育があった。その場面を推測するならば、聖人と門弟たちの集りにおいて、どのように法華信仰を強めるか、法華弘通者としてどう育成し、育成されるか、具体的に真剣な問題が介在していたと考える。こうした全体場面が聖人在世の教団教育であったと云える。

むろん、聖人の遺文によって立証されねばならぬ事柄ではあるが、どの遺文においても聖人が法華信仰を強調されている点からみて、法華経の信仰人を育成すること、聖人の重大な課題になっていたと想像できるのである。法華信仰の不滅性を理念的にも、実際的にも滅後にも残そうとするものであったのであって、信仰の火だね（仏種）を実際に不滅なものとするための教育が行われたと思うのである。いわば教団の教育の課題的な源泉として、聖人の法華教育があったといえよう。

さて聖人の教育課題—法華経の信仰人づくりを受け継い

だ聖人滅後の教団は、どういう努力を払い、どのような成果をあげてきたのか、歴史上の問題もあって興味深いのであるが、その余祐はない。これからの研究課題としておく。

もう一つは教育ということ云えば、檀林を想定する人が少くなくない。僧徒の教育の場として檀林は天正年間（十六世紀後半）頃に生れた。（日蓮教団全史・上参照）その後関東八檀林、関西六檀林と称されているように檀林の発達がみられる。檀林以前の学徒の教育は学室、談所が主なものであったが、檀林がその使命を受け継ぎ明治初年まで続いたものである。檀林教育において、教団の教育を主に荷負っていたと思われるが、教育課題をどう意識され、教育問題にどうアプローチしたのか、天台三大部、宗学の講義を通じてどう肉迫されていったものか、という問題があろう。今日の法縁がかつての檀林の消長と無関係ではない。寺院（本末）制度組織の背後を知る上でも、当時の教育の実情を把握されねばならない問題である。

(三)

明治維新を迎えた教団は日蓮宗と称することになり、教団形成の上でも「御一新」という意識があつてこれまでの諸檀林制を改廃、日蓮宗大教院の創設、明治八年には本宗

の教育方針を決めた。その間、幾多の混迷を経て日薩、日鑑、日修師らの教育制度の改革が行われている。薩師の改革は分散されていた全国の教育組織を十二教区にし、東京芝二本榎の大檀林を頂点とする中檀林、小檀林、三・五・四制ピラミット型の教育制度ができたのは明治一七年である。この時期の教団教育の仕事は改革された教育制度において荷負うことになった。

その後の教育制度の変遷は明治二八年の改正、明治三六年の改正があり、大檀林、中檀林を合併し翌年日蓮大学林が設立（専門学校令による「大学」設立認可）された。のち日蓮宗大学↓立正大学となった。その間に地方の檀林は合併、あるいは廃止されていった。たゞ一つ山梨県身延の西谷檀林が明治七年身延檀林として復興、↓祖山学院↓身延山短大・高校として今日に至った。

明治維新の与えた影響は質量共に想像より以上に大きなものであった。ことに幕末から明治にかけての廃仏毀釈は教団の存立を脅かした社会事件である。仏教と神道の社会的地位の逆転、僧尼の選俗、寺院廃寺整理、檀家制に変わる氏子制、冠婚葬祭の神式化など教団を構成する檀信徒大衆の信仰動搖、僧侶の困惑を経験したのである。そして、いわゆる御一新の時代、文明開化の時代に対応する教団教

育の問題があつて教育改革が行われたものであった。この教育改革は主として檀林を新しく復興させ、統一を企図したものであったと云われる。

それは、①薩師自身、中村、飯高両檀林に学び、遠く金沢の学僧優陀那日輝師に師事し充治園に修学した。のち東京白山に、あるいは池上南谷檀林に宗学を祖述した学匠であつたこと。薩師にかぎらず多くの学僧は檀林出身であつた。檀林教育の改革が望まれていた。

②幕末し明治の「皇道維新」「廃仏毀釈」の大風によつて、例えば日輝師の水戸檀林が明治二年廃仏の犠牲となつた。（水戸藩の廃仏は久昌寺をはじめ十三ヶ寺の廃寺整理が行われた。）次いで明治六年上総の小西檀林、明治一五年には飯高檀林の宝蔵を焼失、烏有に期し復興し得なかつた。こうした形で大小の諸檀林は衰頽し新しい教団教育のぞまれていた。

③もう一つはこの時期の教育改革が新政府の文教政策によることが目立っている。明治五年教部省を設置、三条教則を宣教するための大教院を設け神主・僧侶を教導職として養成された。また明治四年文部省を設け、翌五年学制を定めて大学校、中学校、小学校を設立、新時代の国民教育が開始された。以後政府の文教政策に強い影響を受けなが

ら、教団教育は大教院↓大檀林↓大学林↓大学を頂点とする教育制度の変遷のあらましである。

しかしながら、明治以後の中檀林、小檀林あるいは小学林、沙弥校といった中級、初級の教育が殆んど育たなかった。上級教育（大学）を支える下部が廃止合併されていったその後の経過は、教団教育制度上の重大な問題点である。教育制度の歩みを概観しただけでも、今日、教団教育の危機に立っていると考えられる。さらに教育の内容を見るとき、今日そのまゝ必要だと思わないまでも、初期の教育課程、学科教科書など具体的なものが多く仏書外書の学習に力をそそいでいたことがわかるのである。日薩師の学寮の各級科目をみると次のようである。

〈上級〉

- 經部 註法華經 大涅槃經 觀經 金光明經
- 台部 文句 止觀
- 宗部 内外祖書 興記 日向記
- 雜部 釈迦譜 闕藏知津 大論 中論 起信論 別頭統紀 和漢高僧伝 諸宗經疏 破邪集
- 外典 詩經集註 書經蔡伝 周易本義 老子 莊子
- 大日本史 史記

〈中級〉

- 經部 法華新註 維摩經 像法決疑經 戒經
- 台部 玄義 金剛鉾 十不二門指要鈔
- 宗部 安国論 十部祖書 祖書綱要 宗義鈔
- 雜部 高祖年譜並攷異 天台別伝 艸山集 輔教編 護法資治論 扶桑隱逸伝
- 外典 四書集註 左伝 皇朝史略 政記閑邪集 国地総論

〈下級〉

- 經典 法華八軸 遺教經
 - 台部 四教儀 大部四教儀 法界次第 小止觀
 - 宗部 開日鈔 宗門綱格 艸山要略 如来秘藏録 弘經要儀
 - 雜部 註面讚 本朝法花伝 緇門崇行録 六物図説
 - 外典 大学論語 蒙求 十八史略
- 以上である。雑部、外典に記載されているもので当時のキリスト教との関係で選ばれている書目もある。經部、台部、宗部など基本的な書目をあげているが、これらの教科書は大教院↓大檀林↓大学林と使用され、また西洋文化の摂取のため福沢諭吉の「世界国尽」「西洋事情」「学問のすゝめ」などが使われたりしている。教団の自己目的とする法華經弘通のための学習を基本とする教育大系として選

んだものであった。しかし、各教科書に見るとおり平易なものではない。十分理解させるための教育方法など苦心があったと思われる。教育のむずかしさという点から云っても、基礎教育期間の充実が望まれるわけであり、中、初級教育の欠落は上級教育をも脅かすものになるのではないかと思う。云ってみれば、学僧の輩出が困難になっている基盤があるということである。各種の講習会、研修会などで補えるものではない。教団教育が真に時代に対応し得るためにも、根の深さが必要であり、布教伝道に従事する布教師養成のみならず、むしろ基礎教育に対するビジョンを確立する必要がある。これらの重要な仕事を大学だけにまかせるのでなく、僧侶の輩出過程を重視する教団的な視野において、教団教育の再検討の時にきていると思う。

(四)

最後に、現代における教団教育の確立への展望を試みる必要がある。教えを中心とする共同体として時代に貢献し得るその可能性への追求な各仏教教団において試られており、わが教団においても決して無策ではない。真宗本願寺派の門信徒会の運動、大谷派の同朋の会運動、浄土宗のおてつき運動、本宗の護法運動においてはじめられている。だがそこで切実な問題として出てきたものは人材がな

いというおしこせまった問題に突き当たっている。近年の著しい仏教教団の傾向は「教団教育」をどうするかという問題が今日的な課題になっている。

各教団の教育への投資には見るべきものがあり、真宗大谷派の教科書出版リストをあげるまでもなく、本願寺派、浄土宗、キリスト教（非常に発達している）など各種の教科書が数多く供給されていることは注目に値する。

もう一つ重要な問題がある、それは、なるほど教育には設備や施設・環境が必要であるけれども教育管理、運営が問題視されている。簡単に云えば教育投資の効果である。果して教団教育の成果をあげているかどうか、教団教育の今日のあり方が問われているのである。教育の効果はすぐに期待できるようなものではないことは自明なことである。だが教団にとってどのような人材を必要とするか、護法人信仰人に対する具体的なイメージがなければならぬし、そのための教育課程を含めて教育のあり方が検討されなければならない。ことに将来の宗教人としてのあるべき資質について、各方面から充分論じられてしかるべきものと思う。教団が背負っている諸問題はすぐれた資質を持った人材が多く輩出することなくして困難だからである。

そのような意味で「教団教育」の問題を理念的にも、実

實際に追求するべき時点にきていると考えるのである。

(付記) 前述したように教育関係資料が不足のまゝレポートしていることをおことわりしておく。参考文献は日蓮教団全史(上)、諸檀林並びに親師法縁、日蓮教団史概説、新居日薩、立正大学生活、宗教史(山川出版社・体系日本史叢書)など。ほかにキリスト教教育の理想と現実(青山学院、関西学院編、創文社)が参考になった。